

〈竹山道雄を読む〉

賈金の裏から真理が現れる

稲賀繁美

本巻に収められる論考を通読しているうちに、無性に腹がたってきた。もとより書いてある内容に承服できない、というのではない。だがなぜか不穏な感興が腹の底から湧き上がってくる。その混乱した感慨を分析してみると、いくつかの相が重なっている。

まずは戦前期欧州を体得できた著者への、いわれなき羨望。ナチス擡頭期の世相だが、たとえ肌で身近に接し得たにせよ、それを曇りなく綴ることは誰にでも適う技ではない。その背後には「一高のプリンス」と呼ばれた著者の英才ぶり、並外れた器量があり、知的選良と呼ばれる特権的な地位を支えたその出自すら忍ばれる。そして戦前期に知られざる西班牙や希臘にまで足を伸ばして得たその稀有な知見もまた、もはや二度と追体験などできはすまい。今日、観光旅行で接しうる同じ土地からは、当時の趣の多くは消え去り、著者が接したような境涯も、すでに失われた過去に属するからである。

だがさらにその紀行文には、著者の類まれな社交術も与かっている。道すがらの牧人や「ジブシー女」、出稼ぎの異邦人「大天使ガブリエル」、あるいは行きずりの「パリの老嬢」たち。旅先で自在に会話を交わし、彼らとの遣り取りの一隅から土地の風物や人情を彷彿とさせる。陰影をも含めて、明暗交々、克明にそしてありありと——。この話術と叙述の秘訣はどこにあるのか。

旅先での著者の自然体の行状、その健脚と詮索力。一九三〇年代から六〇年代に及ぶその記録は、もはやそれから半世紀の後には、追従を許さない。「海外旅行記」が世に見識を示す時代はすでに去っ

た。半世紀後の己が貧相な見聞と照らし合わせるにつけ、末裔の不甲斐なさばかりが際立つ。「来て・見て・考える」——著者がモットーとした、そんな教養というものの実質が悉く失われた、今の空虚な global 時代への呪詛・慨嘆が募ってくる。

たしかに読み継がれるべき文業がここにはある。だがそうだとしても、ツイッターとやらに浸って日々を過ごす今の若い世代が、はたしてそこから何を糧として読み取ってくれるというのか。もはや生身の著者を知らない世代として（竹山道雄を読む）。それが、解説者の頂戴した「お題」だが、その解説者自身、すでに還暦を迎えている。どうにも手遅れではあるまいか——。そんな危惧が脳裏を掠める。いまや学術の世界は矮小化の一步を辿り、知識人種が自由に意見を交わす論壇といった公的な場も失われて久しい。戦前・戦中の駒場第一高等学校の教官控室ではナチズム批判や軍部への物言いも比較的自由だったという。だが顧みるに、今日ただいまの研究職は、外部評価や概算要求書類の作成に追われ、異国からの来賓があっても満足に応接に割く暇とてなく、同僚と知的会話を交わして思索を磨く余裕すらない。「スコレー」といった言葉の口にしうものなら、「この非常時に危機意識が足りない」と叱責される。時代が違うのだから一概に比較するのは無理な話だろう。とはいえ自由に物も言えず、上意下達に唯々諾々とするほかない今の時代は、軍国主義の昭和の過去よりも危ういのではないか。テクノクラート支配が電子媒体の技術連関と癒着し、高度経済成長期の制度設計が右肩下りの財政事情に法外な無理を強いていながら、軌道修正もままならぬ。一見無害で退屈な「日本社会」だが、「きまじめ」な形式主義が横行し、過度な職務忠実が異常性格や精神疾患を列島全体に蔓延させている……。

## 二 旅行記・滞在記を読みなおす

本巻冒頭の「スペインの賈金」を讀者はどう読まれるだろうか。矛盾や対比が「どぎつい調和」をなす土地として、竹山はイベリア半島の風土を描く。「美が醜であり、醜が美」であって、「ホセは『愛するが故に殺した』のである」（メリメ原作、ビゼー作曲の歌劇『カルメン』）。たしかに国民性とか風土といった一般的性格規定は、今ではご法度な手法だろう。だが人間は、未知の世界での矮小な体験から過度に一般化した原理を引き出す性向を脱しえない。それは知性のエコノミーであり、人はそれなくしては無際限な体験を整理できず、狂気に見舞われる。竹山は「上からの演繹」の危険に繰り返し警鐘を鳴らしている。旅先での経験を巧みに形象化するその手腕は、「演繹」の危うさが自らの才能とも裏腹であったことへの、自戒ではなかったか。

賈金が横行する南欧社会の実相は、遠来の旅客ならばこそ、容易に被害者として観察できた。ここに旅先の社会に対する悪意や蔑視を読み取る向きもあろう。後年、冷戦期に、招待されたわけでもなくソヴィエト連邦を訪れた竹山は、満足な地図も手に入らず、モスクワ市民が我が街の案内に手古摺る様子を仔細に描写した。それを共産主義社会に対する中傷と受け取って憤慨する進歩派人士が、日本の知識人層には少なくなかった。そうした反応からは、かえって妄想的な革命待望論や、時の権威に対する阿諛追従がいかに跳梁跋扈していたかも察せられる。竹山の手法は、究極の真実を開示するものというよりも、むしろ世間の常識の偏りを探知するための、方便としてのリトマス試験紙ではな

かったか。「理屈と膏藥とはどこにでも付く」は竹山の口癖だった。そう娘婿の平川祐弘は証言する。コルドバ郊外を散策する竹山は、尼寺の壁に不思議な窪みのあることに気付く。「よく見ると、それは円形の秣桶まよぶけのようなものである」。それは棄子場すてこばで「意外にも桶は片方が蝶番で壁にとめてあって、奥にむかって滑らかにくるりと回転した」。その回転扉の奥の闇を竹山は凝視する。ここにこの人物ならでの、フィールドワーク技法が垣間見られる。ギリシアを訪れた際にも、竹山は類似した志向を覗かせる。テゼウス神殿の廢墟内陣の積石の一角に、穴が開いている。「その闇の中に妙な光が四つ輝いていた」。正体を見極めることもできぬまま、柱に背を凭せ掛けて微睡んだ竹山は、ふと覚醒めて欄間を見上げる。牧童が何かを追う声の彼方には、鼻がいた。「不可思議な光」はこの二羽の鼻の目であった。はたしてそれがミネルヴァの鼻であったか否か、竹山は黙して語らない。だが荒廢した土地の、死んだ廢墟の闇に宿る謎は、夕暮を待つて初めて叡智の片鱗として復活する。

### 三 經驗の蓄積、ギリシアから韓国、そして再度フランスへ

思うにこれら一九三〇年代後半の欧州體驗が、竹山の思索に深い襞と陰影を与えたようだ。ギリシア出国のおり、竹山は係官と出国税の収入印紙をめぐってトラブルに巻き込まれる。印紙を売る煙草屋の主人も、裏で役人と結託しているのではないかとの疑いが頭を擡げる。急性猜疑妄想の初期といてよい。さらに、卑屈にも役人に籠絡される「中国人」の自分と、帝国の威光を嵩に着る居丈高な英國人との落差から、白人支配と植民地的隷属の実態をも垣間見る。似たような目にあった経験者なら、

お分かりだろう。ここで義憤に駆られ、声高に正義を言い募っても空しい。むしろそれは、インフレ下の薄給に喘ぐ木っ端役人の境涯や、利権絡みの世俗権力行使の現場を实地検分する、何よりの機会だった。「人生はそういうものだ (Cost of Life)」。旅先の不愉快にこそ、人生の醍醐味もある。過ぎてしまえば卑小なこうした経験は、人に仁徳への誘いとでもいうべき「余禄」を投資する。

戦後、日韓条約締結に揺れる時期のソウルで、この南欧体験が生かされる。慶州で購い「法楽」を得た陶磁を、竹山は税関で巻き上げられる。国宝級のものだと言い張って国外持ち出しを許さない堅物係官の前に「私はあきらめて、逸品二つを税関に残した。しかし、私の鑑識眼が立証されて大いによろこんだ」。いささかの強がりかもしれないが「税関吏たちが少しも威張らず、厳正に職責に忠実だったのもよかった」との感慨が続く。理不尽な事態に直面して發揮された、この切り替えの伶俐さには、ギリシアでの出国税の一件が織り込まれてはいまいか。「ただおかげで、私は韓国の伝統芸術についての心からの礼讃を記す実感を、座右から失った」。負け惜しみを心理的に昇華する「理屈」である。文化の間には障壁があり、そこから糧を得るためにも、旅人には通行税を払う義務がある。

時にその「通行税」は「贖金」という姿をとって、国境の往来に錬金術じみた変幻自在の振る舞いすらみせる。別の文脈だが、竹山は「一日モ早く死ンデクレ」と始まる、罵詈雑言の偽名投書を受け取った。その折りの反応にも、同様の澄ました屈曲と、融通無碍な切り返しが披露される。——この投書のおかげで新聞のコラム記事執筆のための材料が見つかった、「助かりました。またお願いいたします」と竹山は「谷川徹三」を騙る偽名氏に感謝してみせる（平川祐弘『竹山道雄と昭和の時代』三七〇—三七一頁）。恩を仇で返すという表現もあるが、これは仇を恩で返す類だろう。そこには林語堂の『有

閑随筆』にも一脈通ずる「幽默」<sup>ユーモア</sup>、巧まざる諧諷が仄見える。直情径行の正義感とは一味違う、エスプリの発露である。

「フランス滞在」は、長編にわたる滞在記からの抜粋だが、不思議な郷愁をそえられる。評者もたしかにこの目で捉えていたはずなのに、書き留め得ずにいた生活の細部。それが実に生き生きと語られていて、著者の観察眼に改めて瞠目する。当時の政治情勢の裏で、一九五〇年代終わりの巴里の雰囲気が濃厚に漂い、庶民生活の裏面にまで手が届く。向かいの窓のカーテンの奥にはいかなる人生が潜んでいるのか――。ボードレールの散文詩が見事に甦る。八〇年代にはまだあちこちにその片鱗が残されていたけれど、今ではもはや感じられず、そこに入り込むことも二度と許されない「秘密」の数々。この町に棲息すれば否応なく出食わしたそれら日常の椿事が、見事な綴れ織りとなっていて、興味尽きない。とりわけ、モンマルトル育ちで、世紀末にはロートレックの行状にも通じていたという、シャンタル御婆さんの話術は、絶品だろう。「子供がいるあいだはイギリス人は姿を見せないよ」。皆が爆笑する中で呆気に取られる竹山に、同席の園丁が謎解きをしてくれる。「イギリス人」とは月経の隠語。ナポレオン戦争当時、英国の軍服が深紅だったことに懸けた猥談である。

#### 四 加齢と美的認識の深化

竹山が高野山に三日ほど籠ったのは昭和三十四（西暦一九五九）年。奥の院に向かう途中の中の橋のほど近くに「汗かき地蔵」がある。「人間の一切の罪業を引き受けて、衆生に代わって焦熱地獄の責

苦をうけ、永遠に汗を流している」のだと、竹山は記述する。一即一切、一即多である。一点にすべてが集約される。一体の地蔵が世界の邪悪を一身に背負う。その「人間に代わって苦しむ救済者」のうちに、竹山は「キリスト教的な考え」を見て、仏教におけるその位置づけを思案する。それに続いて竹山は「慈円大夫」の名を耳にする。なんでも「よほど乱暴な荒っぽい行者のような人で、さかんな破壊をしたらしい」。だがどうもおかしいと思って確かめてみると、これは「ジェーン颱風」のことと判明する。

颱風は風水害の元凶といわれるが、正体は中心の空虚な目に向かって周囲から反時計回りに吹き込む気流の渦である。「汗かき地蔵」が人間の罪業一切を一身に引き受けるのと、さして異なる現象ではない。同じ年、竹山は弘法大師・空海の生地、善通寺にも訪ねている。戒壇巡りの長い闇の道を辿り、無明を実感する。どうやら著者はこの頃から東洋的靈性といったものに惹かれるようになる。だがその探求心の根には、スペインの尼寺の壁に仕掛けられた揺り籠や、アテネの廃墟の積石の穴へと惹きつけられた同じ著者が居る。「汗かき地蔵」や「慈円大夫」の謎の核心へと思わず吸い寄せられ、行く手も定かならぬ暗闇への通路に引き込まれがちな性向が、旅先のあちこちで脈打つかのようだ。思えば竹山道雄は、ドルドーニュのラスコーの洞窟にまで足を延ばした、穴倉探訪者でもあった。

「西の果ての島」は五島列島紀行だが、そこには隠れキリシタン信仰への竹山の関心とともに、地下洞窟への幻想も、巧まずして露呈する。石灰質の丘陵の露頭を見るや、竹山はカプリ島を思い出し、鷗外が『即興詩人』に琅玕洞と訳した、あの青の洞窟にも似た洞穴が、嵯峨島の火山の裾野の下、海面下に密かに隠されているのでは、と夢想を逞しくする。またアルプスでシンプロン・トンネルを抜

けてイタリアに入ると、それまで吹雪が荒んでいた北欧から、にわかには明るいロンバルディアに出て、旅人は生気を取り戻す。竹山は、規模こそ違え、それと似た感慨を、鎌倉の小袋坂トンネルにも抱いていた。この傾斜した羨道は、竹山にとって空間を跨ぐだけでなく、時間を遡る秘密の通路でもあったようだ。

「古い井戸を覗いて、暗い底に自分の顔を見ると、何だかこの世の人間ではないような、むかしの物語の中の人物でもあるかのような気がする」。それは高野山の中の橋、「姿見の井戸」の体験とも呼応する。底を覗いてみて姿が映らなければ、その人の命はもう長くない、との言い伝えである。なにやらこのあたりに、竹山の不思議な感性が宿っている。それは土壌の地下世界への憧れのようなものとも結びつく。「きつと土は、このように人間の屍を啖くってその骨にこえたものほど、人を落ち着かせるのだろう。花は、その根に人間の骨を抱いているものだけが、ほんとうに人の魂を慰めることができるのだろう」。梶井基次郎「櫻の木の下には」（一九二八）や坂口安吾「櫻の森の満開の下」（一九四七）にも通ずる感慨だが、それが、東京から鎌倉に居を移し、霊園を散策する竹山の胸に去来した心象風景だった。

## 五 宗教への問い・神道へのまなざし

井戸の底を覗き込む姿勢はまた、釣り糸を垂れる体験にも呼応する。アルベルト・タイレの極東美術論に引用された竹山のドイツ語による所論に、その脈絡が明かされる。「釣りをしている人は退屈

しません。釣人は空虚な空間のなかに独座しています。しかし浮標に心を集中して絶えず期待のために緊張しているとき、その人にとって時間は充実しており、空間のむなしさが克服されます。(中略) 期待を呼び起こす集中力によって日本の藝術は、空虚を充実することを会得しました」(片山敏彦訳)。

卑見では「緊張」という語彙は西洋語への翻訳の都合上避けがたいとしても、あまり適格ではないだろう。むしろ竹山がミケランジェロの「有」(『存在』)の追求に対比して定朝の阿弥陀仏に見た「中間的表情」がより適切だろう。竹山は日本の歪な陶磁に「未完成で受動的な存在」を見て、「照っているような曇っているような、中間体である」「われわれはある不確定だが自由な雰囲気の中に遊ぶことができる」と述べる。模索の態だが、受動でも能動でもない「中間体」の境地、印欧語族の術語でいえば「中動態」*das mediale* といったあたりが、竹山の「釣り糸」の譬えには、より忠実な記述ではあるまいか。「弛緩した緊張」とでも矛盾した形容を弄する他ない境地が、水底の霊を水面へと召還するには必定なのだから。徒らに緊張すれば、水底の魚はそれを聴く感知して逃げてしまふ。「無」とは不在ではなく、潜在と顕在との「あいだ」に意識を解き放つ技ではなかったか。そして「賀茂神社の方へ」でも語るとおり、神道の社に祭る「こ神体」とは、畢竟するところ「メジウム」*medium* つまりこの世とあの世、幽界と顕界との中継ぎの「媒体」たる「神籬」(ひもろぎ)でしかなかった。

幽顕一如。「釣り人」の比喻をこの世とあの世との関係に当て嵌めれば、井戸の底を覗き込む水鏡の体験も、よりくっきりとした輪郭を結ぶはずだ。著者が松江で讃仰する神魂神社かもちの質素な社も、そのことを物語る。「本殿には何も無い。ただときどき神がきて宿りまた去っていく、入れ物にすぎない。はっきりした属性はみな避けてある。それはほとんど空白である」。竹山は自分に先んじて欧州で美

術を考究し、帰国しては大磯で『日本美術の特質』を執筆した矢代幸雄の議論にも目配せしつづ模索する。だが造形の妙に注がれるその眼差しは、どうやらその背後に隠された不可視の存在へと思いを馳せているようだ。京都・六波羅蜜寺での著者の幻視体験も、小野篁の靈界下りが若者の人気を呼んでいる陰陽道再流行の今日こそ、再読に値する論考だろう。「人生夢幻のごとくであることを痛感することこそ、積極的な活動のもとである」。この考え方が「日本人の精神の一つの基調」をなすとみる竹山道雄の精神史観。それは、シーシュポス神話に関する解釈では竹山と対立する九鬼周造が、一九二八年ポンティニーでなした東洋的時間論とも共鳴している。九鬼もまた、谷底から何度となく巨岩を山頂に運びあげるといふ一見無駄な永劫の反復に、罪業ではなく生命の積極的な可能性を見た。この見識はまたその晩年には、竹山道雄を、西方キリスト教に対する根源的な疑義へと導いてゆく。

\*

\*

井戸は地下世界であちこちに四通八達して、連絡しあっている。

再び多度津は空海の善通寺に戻ろう。善通寺の曼荼羅巡りのトンネルを抜けると、そこには宝物館があった。平賀源内の遺品も展示されている。この奇人は下剤まで発明しているが、腹を空にすると、「空」の字を分解して「ウルエス」といふ西洋臭い名前を付けたという。現代中国の藝術家、徐冰<sup>びん</sup>は自分の欧文表記 Xu Bing を漢字の部首へと巧みに変形して、新案の表音漢字を発案したが、同様の発想が大江戸アイディアマンの風来山人にもあったことになる。

それに先立ち竹山は金毘羅宮を訪ねている。高橋由一の《鮭》や《花魁》に通じる写実表現を竹山

は堪能する。「極端な実証主義で、魚の刺や目玉や貝殻の光などを、真摯にきびしくえがいている」。本巻解説者、芳賀徹氏の『平賀源内』や『絵画の領分』といった名著は、この竹山道雄の直接の感化から成立した。それは福武書店版『竹山道雄著作集』第二巻解説に披歴されたとおり。また本巻末尾の「日本文化の位置」を読み返すと、本選集編者、平川祐弘氏の思想に、竹山道雄の影と響きがどれだけの広がりと深さをもって木霊しているのかも、歴然と眺望されよう。そこには学閥とは無縁の一筋の学統が見遙かされる。

---

いなが・しげみ 一九五七年生。パリ第七大学博士課程修了。比較文学比較文化、文化交流史。国際日本文化研究センター副所長、総合研究大学院大学教授。主な著作に、『絵画の黄昏——エドゥアール・マネ没後の闘争』『絵画の東方——オリエンタリズムからジャポニスムへ』『絵画の臨界——近代東アジア美術史の桎梏と命運』『接触造形論——触れ合う魂、紡がれる形』（以上、名古屋大学出版会）他。